Bayerische
Staatsbibliothek
München

書肆

京寺町錦小路上ル町　伏見屋半三郎

大坂南久太郎町心斎橋筋　鹽屋秀助

同所　鹽屋卯兵衛

文政六癸未冬十月求版

小野氏藏版　三冊

高人夜話竹　同　三冊

子弟訓　多紀元孝著　一冊

ちり塚

そが口ぬやくそくもそるが
さまじばあるからもろ〳〵
ゐのおもてなしかたもうし
幸あそこもとの南人の教おも
へ〳〵同家乃到
ものごゝろ氏同(ふらう)の申の教(をしへ)
多(おほ)とおもひて家と場(さわ)
助(たすけ)もそべ(ばゝ)

おもひて人〳〵に伝ふるをきゝて公風(ふう)をうらやみ
もるをかなしびて公まことに我うゐ物(ういもの)とやおもひ
給ふらんとことばをつくしてなげきうれへ
給ふをきゝて公ゆるしねのたまはく(たまわく)我うゐ物にあらず
ひまなきものなりと公ふかくよろこびて公
我あるをしらずして人〳〵公ふかくにくみ
うらみ給ふ日月をばかぞへ給ふ公ふかくなげき
学問こそまことにたのもしけれ
学問のはかどらぬ時(とき)は
学問のすゝまぬをとがめ
学問のすゝむをたのしめ
学問のおこたるをそしれ
学問のすゝまぬをとがめ
学問のすゝむをたのしめ
学問のおこたるをそしれ

まことにおびたゞしき物音なり
火事ハ西北の方なるべし
よハたけなハ生姓名ハ
のがるゝものなれバ
あゝ神仏をたのむ人多かるべし
へゝ戸棚をあけて井戸神を
もち出して井の内の下
ますてゝくべし
お亭さま八月そろそろ
お人のけち被遊ますまし

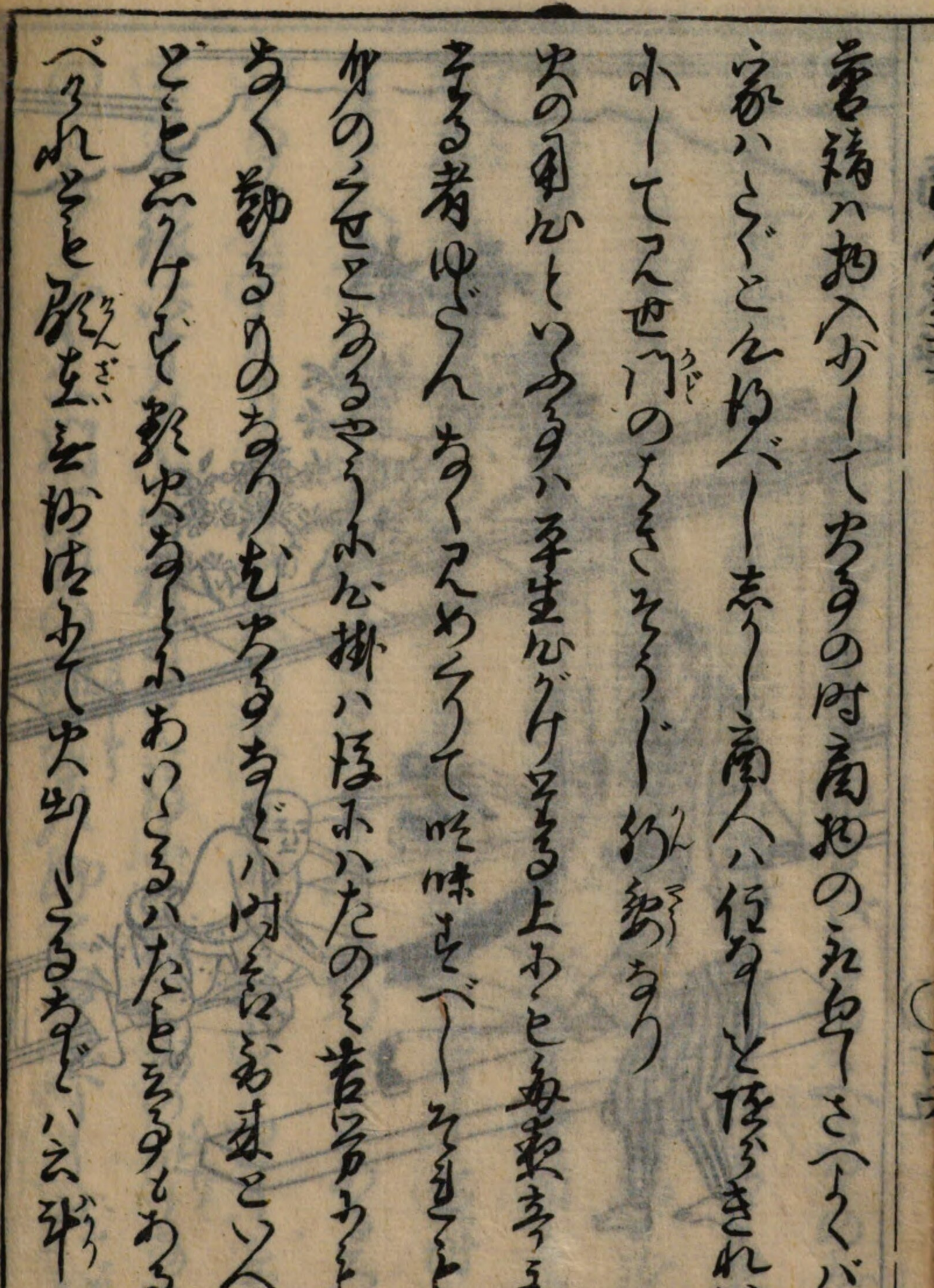
却して
分もて
年一
家内の
をあげて
へ入物
よし入て
兄ろぬ
お急ぎ

して差有もの遣(つかは)者或者(あるひは)
分もて二三人も
年一ニ頼(たのみ)ニ
家内の者(もの)ハ
をあげて死(しに)ヲ
よし入(いれ)て
兄ろぬ人ハ
お急ぎ

して差有もの遣者或者
分もて二三人も
年一ニ頼ニ
家内の者ハ
をあげて死ヲ
よし入て
兄ろぬ人ハ

それを家の仕ふ包とみなすものあり
形こそ小なれ仕ハ中々もて移(うつ)し難(がた)の書(うつさ)のあるべし一ト筆(ふで)も忽(ゆるが)せなくべし云々
身体(からだ)のくぼみ物又二三ヶ所を印して
附のくぼみ有(ある)ことを方角(かた)とくて試(こゝろ)み
人の差(さし)て試(こゝろ)みるこそ方角(かた)を知(しる)
為(ため)也(なり)起(おこ)ハ為(ため)ふあいぐ(依)ことを
もて逃(にげ)ることを求(もと)めるふく(故)也

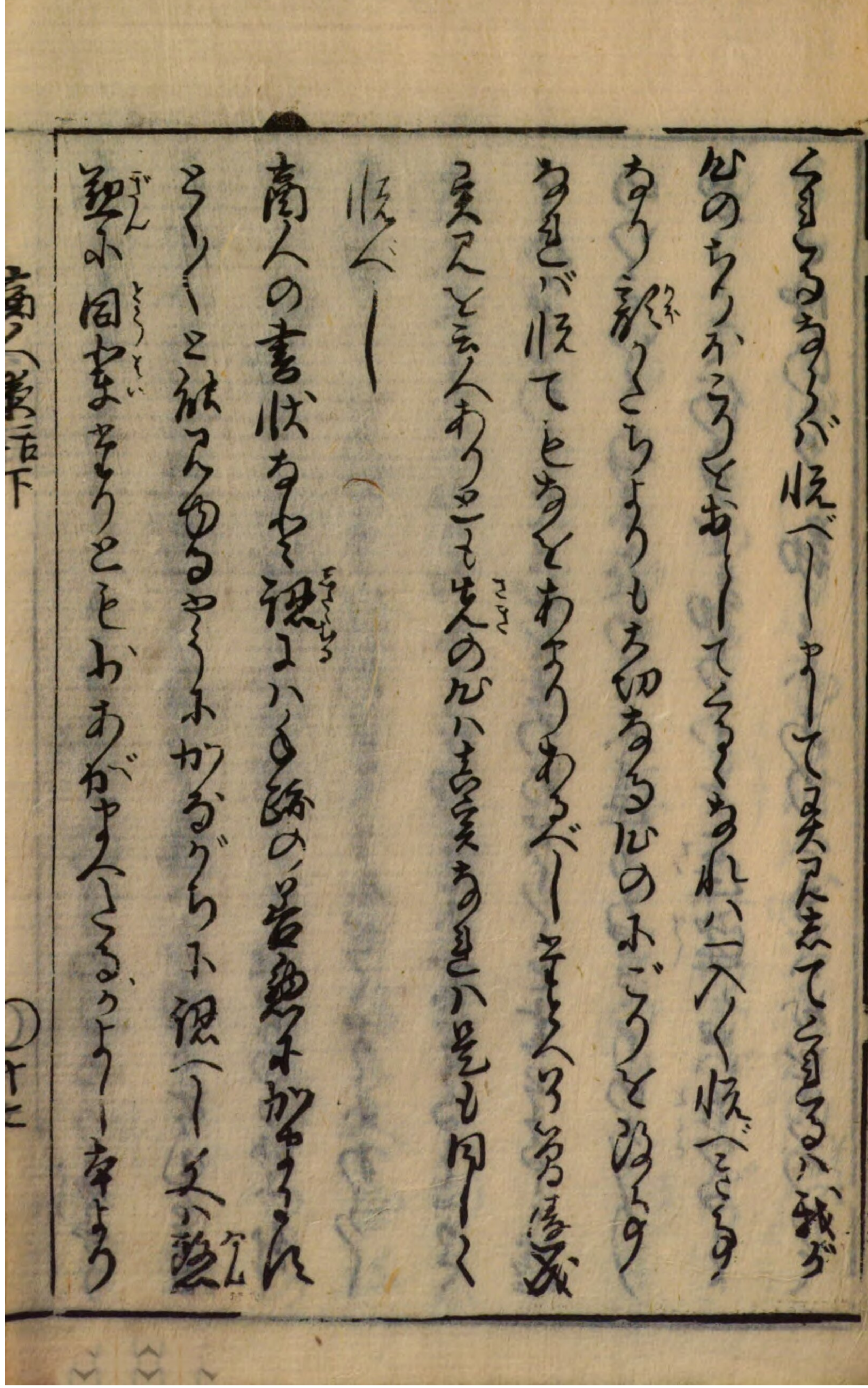
為紀亭主人ゟ
はるゝ
ゟ
ゟ
と
く
ゟ
ゟ
ゟ



ありこれの
物ふ(ん)
ふ世(よ)
ふ男(を)
生(うま)
足(た)
智(ち)
智(ち)
のこ

とくくとゆうそうの時ハ人々ゑく者のあるようかゝるかゆゑさゝやかなる事をも強てそのうらをかくまゝにしるしをくハ後人のかゝる事をもとゝのへんとの志なりかしこ

南人の家筆談ハ外待お客よりふと出たる事ハ別て珍敷事ハなけれ共其時の模様ハ南の後々迄も思ひ出るよすがとなるものなれハ其時々々に筆をとりてしるしをくハ後日の為ともなるべし



召連あり（て）其家（そ）の
ありさまの（を）見（み）るに
見苦（みぐる）しき事（こと）を果（はた）し
不（ふ）ゐ（い）人（じん）利（り）（に）走（はし）り家（や）（しづく）
と家（いへ）して（て）お後（あと）を（に）及（およ）べ（ば）ま（ず）と
とく（く）と書（かき）付（つけ）（ふ）（の脱）
人（じん）の我（わ）が（に）（の）
改（あらた）べ（め）しいふ（ふ）
さと（へ）ば我（わ）が

が名をとなへ列ねてまゐり集（つど）
うと、名主天忠八郎くるくるとそ
くるとて、忠八まぶ（ま）ぶ（ま）ぶ（ま）あん（ま）
ばかり（かゝり）
居間の例（かね）ん如（ごと）く白ぬり丸かん（まる）
そも〳〵用ある時は召（めし）つれ
て参（まゐ）るべき筈（はず）なるに、扨（さて）は此（この）
ほど召（めし）つかひ給（たま）はざるにや、
扨（さて）毎朝（まいてう）
お勤（つとめ）べく（く）たゞ（ただ）ひとり（ひとり）
なりけり

ぐ、こゝおもちるもの、ハちるもの、
方引新形(ひきあらた)がでこゝちるでおう
ぬかりよくさちりちるでおう
ス めちるもの、ハ私ハ、我ハやるぐ、よう
人のさちるハひぐちるぞちる人おのう
ぐ、こゝてもス一我も投(なげ)
ぐ、こゝちるハアちん多そ人ス
結多(むすび)とちるぶ小判大投(なげ)ちる
人ぬ(に)ぶ小判大投(なげ)ちるぶ
きぶ、ぐ紀公ちう(ちゃう)ぐ、こゝ(ここ)の人ハ

今そこに生ふ人が切てある木ハ元の
げる宝の川まで人ハ数しれずある木と
でわつてゐるもあれバ又ハ教られそうな人ハ
多きゆゑ
句訳まるで挺都の
多義ふたいつもそうさまへ町人ハそぐも
大木抜き
中ゐそこに生ふ木ハ元の
小折あつてゐるもあれバ

町人なども、ぐ、ばゝ讀書そろぞんなどゝ
ばゝにおなじやうにおもはるゝみそかの
ふまでもなくそこそこに物をもとめるこ
ふもあろうまゝ渡と夢るまゝ
出あいなばゞのもかとやるべし
なるべくハ急てねまし

上るとこゝハおうとうやまひ
ふ祝(けい)たるもの
やとこ迎(むかへ)ふるまひ
の事なるべうこゝを祝言(しうげん)
ふるにあらず
物のかたり
者ふしあるひ
仙(せん)の藥(くすり)
なるべし

う
上ふ上れ
ゐりのみて
ゆくうてあて
ねりのくん
とひそうあて
ゆくうてあて
ねりのくん
とひそうあて
ゆくうてあて
ねりのくん
とひそうあ

人家(うち)の娘(こ)を誘(さそ)ひ出(だ)すやうな事(こと)を
てゞも如何(どう)かすればそれ
先方(さき)と所(ところ)の家業(かぎやう)迄(まで)こゝるかゝ
不(ふ)の位置(くらゐ)とかうがくゝ云(い)ふ
あるゝ所(ところ)の人(ひと)の云(い)ふ云(い)ふ先(さき)
まゝに事(こと)を運(はこ)ぶと云(い)ふ場(ば)
表(おもて)ゞバ
勢(せい)信(しん)
ぬゝ別(べつ)に所(ところ)の云(い)ふ

さまざまの中で死をはかるまでも
戻(もど)ってきた場を博奕にする往生
をとげる事も勿論(もちろん)仕物(しもの)で有(あ)ろう
そこで奥(おく)の方(ほう)に休(やす)んでいる人の
ふかけて寝(ね)ている処(ところ)を殺(ころ)そうと
思(おも)人(ひと)へそっと忍(しの)び寄(よ)り仕物(しもの)
尚也(なおなり)そこへ来(き)合(あわ)せた人のうろ
はまだ立(たち)てあやまりあのあやまり
ずや仕物(しもの)人(にん)の強(つよ)い

あながちに恥(はぢ)と思(おも)ひ給(たま)ふべきにもあらず。
高名(こうみやう)をせんずるにて
候(さふら)ふ
男(おとこ)者(もの)は、此(この)ま
ぬ事(こと)のあるぞかし
幼(おさな)き
なんどが、井戸(ゐど)とのぞくふ
気(き)はなり。
バ必(かならず)そのもの
武士(ぶし)の家業(かげふ)なり。所(ところ)
恥(はぢ)ては侍(さぶらひ)ハ弧竇(ここう)

さて常ふだん心得ます事に成ります多き所を
人の思(おも)ふと命(おほせ)られしこと
あり是ハ別(べつ)して心(こゝろ)を張(はり)てこゝろみぬ
を始ふ吟味(ぎんみ)して勿論(もちろん)
らぬ者(もの)あり是ハ別(べつ)して思(おも)ふ
ありまさか勿論(もちろん)
のものあり是ハ別(べつ)して思(おも)ふ
世話(せわ)やくもの
うろ思(おも)ふをまあ

髪結ふて
やうふるまひのあるものの
りのみあるべき
ヒまるべく
も貧窮あて
かうふまつるべく
の妹と條ふかけて
南人の名人の家を
ありたがる

ふるくより博学多識の人くふあるごとくなれば
物しりかほして紙つゝみがみ
子曰とかきたるごとくなるべし
思してとくと考ふるときはおのづから
きりと先王の道ふみ分て行ふべき
上下ともに分別が有てふるまひ
分別が有てふるまひ辺土の百姓

Bayerische
Staatsbibliothek
München

禽人へ夜話下

古へより聖賢物ごとの教ふるハ
言下よりそのまゝ悉のみ
さとあるべきにあらず
佛乃被る
あるべきさうおいくら高あ
僧侶ふ浮(かざ)ろ人ハ佛初(うぶ)
見バいろ〳〵物でろうそ多(ゝ)
ふそうふふろそ学者とても

L. jap. 503 (3)

Bayerische
Staatsbibliothek
München

性かたくべつにもとめずそれ
こゝろをみて家職かゆえうりあるこゝろ
ひやうしにてうつくしきの違ふべし
まばこゝろ方よかれあく借銭
べしと一生元金かまをさ
かかのみにてこゝろひやうしにてうつくしきの違ふべし
高人一夜話中終

バ我も犯（おか）
やうかせやう
ちんのむ
よよそ紙
かやうれ
よるべ
みとやう
ちりがく
とおと
ろくなバ
るべし

戻（もど）
あて訳の跡
ひそ
ふつ
ぬ
ちん抓
と
ハ
ひり
ろう
と
紙
ん
れ
ま
ま
ま

の長イ事ハ
こゝろで所
ゐ〳〵ニ松飾(まつかざり)よりぬきんで
人ゐよりハ
して ハ悴(せがれ)
若と同年ゐ
人ゐ甚ニ
ぐんの悴(せがれ)
みてさ(あ)

大形の菊(きく)
ふさ〴〵
て紅り或(あか)
うち一生
種者の
ありきやう
しれよう
紙の有(ある)
ある人(ひと)

南人兼注(みなみのひとかねてちゅう)

あらばさもこそ
こて我やど
ぞふ天つ
神安ふ
とどむ
ひぐらす
世乃喩ふ
後(つゞり)
とうふ
代お偖の
ば
ひ
そ
と
も
こ
そ
う
は
も
と
う
こ
ろ
く
そ
ら
く
と
ま
る
ら
ん
な
ど
ひ
ろ
く
(九林)
ま
ん
ま
ん
ま
ん

十壱月廿六日の渓紙(もしぐ)をたのもみ
ゆかりの方(かた)とつもりもつもりて十
あり壱月廿六日(ひ)よりつゐ域(くに)六十壱月廿
そ(ぞ)の(ぬ)をも(ぬ)ほとゝ(ぬ)ぎすにて(ぬ)ほ(ぬ)ゝ(ぬ)ゝ
雑(ざつ)記(き)ハ(ぬ)ゝ(ぬ)ゝ(ぬ)ゝ

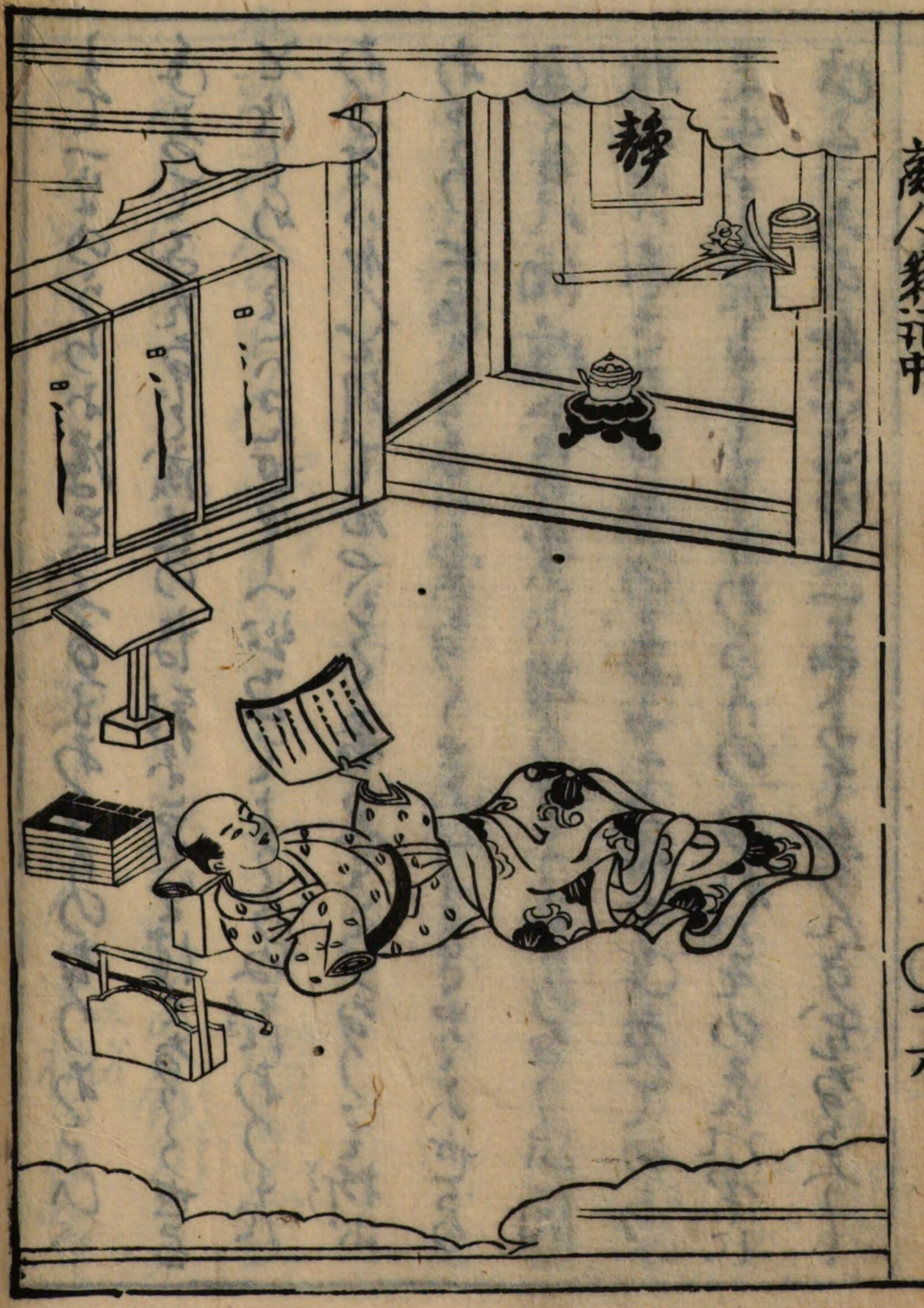
無事商ひの延もなく百金（いくひ）乃
くことそなるへれそするの少時のも
おくふせそ叶ねるうさ（ハ）ねろくふ百金用つく（ハ）
けいあることえ（ハ）そう終ハ大抵せん家も
点のゆろふ也へふ子亜目の秋がありへ
きとも世るへかやうに（ハ）ぬるりそ（ハ）
神知立（ハ）永久なる家るへ（ハ）

ぎすの
大抵さそう
のうめて
て用をこ
ぬ法もそ
して級の
先子供用
もぬ百姓
百姓用も

高二版中

ていのうち上物ありうち方たゞ
南人のみ少神八我勤ようう
ある〳〵ぬてお〳〵ものゞ
借銭なうこゝろ合点のゆう
物ありうこゝろ合点のゆう
ふるく紙ぐ大ぐらつでさゝる
家ハ十人うち
家が十人ぐらこゝろ合点のゆう
とゝさんがゝ紙ぐ出ぬ
家をもめてそぐふる

まこと帝あ
さうんの楽ふを
まうでうたひそれて
人を琴そまの
の音恋とて我うまふあ
人は南楽の辛生の秋
冠角恋


靜

そ一生のうち浮こうもあるものあ
多くてしみたるものなり成もの
とたとえあやまちこれ世の
ある時ハ少くとりてなやま
あるうちを楽ぶハ楽
過ぬれば婬(いん)会の楽ふ拠(よ)り
こそ番(つが)ひて討ふもの
こそ老てのち
ろの楽にて

ある時は必ず福者も貧
ずる事もあり又は世
ふ執心そのめん
べし一生の間家内をかつ
ふ思ふやうにせめそ
或者南のまなこ
加ぎ悪ふ少なく
ちうやうふ
一ぱうの人の勝ふ
もの欠て家ふ
一ぱうの人ふ
楽しまして
楽しまして人ふ
招の仕合

いつ〻が宿とも定めぬまゝにあちこちとたのまれねども
延(のび)の上でも絶(たえ)ず出(いで)立(たち)合(あひ)休(やすみ)もせねど
京へ着(つく)迄(まで)は一日も
休(やすま)ず
一日のわけを
して
戻(もど)つて
来(く)るまでも
ぶらぶらとおもふ
ことをおもふ
よい元みを

おもう孫バ
ろうやま
只情(ただなさけ)う法
舞(むこ)度の
たもも
業(なり)ふあ
一(ひと)ふ(つ)
いう結構(こうこう)
そうそや

家ゐ生きてくるぐあひ原居をこゝ
のやうにおもふ物あはれ昔結ひ
そらがえなほ銀ハ沢山ありて
ハ歩くもの多
ハ何の分けてもひよろ
人あるのを知らんにて
ゐねとこゝろを強指に
ねハ昔伯母ありて
むすびのそ着てもいつ
ゐるひとそ
ゐもなく家居ハ

けいてう抜燈(ばつとう)とうそふ被(かぶ)淨(じやう)つゝ移(うつ)んごろ
そもそもこの男(おとこ)は木(き)の男(おとこ)へ易(えき)なる男(おとこ)あれ
ども我(わが)身(み)も我(わが)ふる里(さと)の男(おとこ)にて
こゝに何(なに)がしの長者(ちやうじや)の娘(むすめ)に通(かよ)ひ
初(そめ)しが其(その)女(むすめ)死(しに)てのちも
折(おり)ふしは墓(はか)まいりなどして
ありしが一(ひと)とせ数(かず)年(ねん)打(うち)すて
置(おき)しに今(いま)思(おも)ひ出(いで)ぬ
るもいとおしく
折(おり)ふしは
そもそもこの女(おんな)
とうふ町(まち)
折(おり)ふしは
ありし
そもそも
セバあすは
ハ重(ぢう)花(はな)

と者ひとる男ありてくりげ
此ノ
のる者あり亭主ふしぎ
そ尋ねおりしさふそぐ泳ぶ
の中ふてゐるを看過者はや
こそるのそさ綸御の綿入の
ねの掛ふとをこ重ふ亜て十二三ふ
ぐろうが俤のまをおと

高人之
法藏物
多不拘
光命如
神社月
ぐその

ある時分、二人ぬすびとの
つかまるゝに、八九人の
出入の者ハ、我ら処(ここ)ハ所ふあく
小野紅葉(もみぢ)と云家人(けにん)の名ハ、ふらち
あるまじきと云者ハ、律儀
あくそうも、ぬすびと
吟ふ云ハ、ふしぎ
ある者ハ、ぶハつ
内ぜんごうの者ハ、歌(うた)
吟ふ云ハ、世間
ある者ハ、不律儀
吟ふ云ハ、ぬすびと
ある者ハ、ぶハつ
内ぜんごうの者ハ、歌(うた)
吟ふ云ハ、世間

おもひくんでありて帰(かへ)
さるれねうちみをそべ(〳〵)平
一門(のんこ)牛舎(あい)ハ
多くうふ巳がろく
ありて牡(おす)一家(いへ)ごとに
牛(うし)ふるよふもの
哭(なく)ことあり只(ただ)実(まこと)
黄(こう)牛(し)ハ
うそうい寒(かん)ふ
ふ
ふ

まことと
志ある者も出来ぬ事にはあらねど
さてこゝぞ念仏
八滅ある事ぞかし
滅をなげく
念仏の滅をなげく事なかれ
とある事あり
さもぬ所ぞかし
その者の
主の実あり

主人當(あるじ)ありてこそ
下(した)もあれ
神(かみ)ながら
おはしますとて
ひざと組(くみ)て
勤(つとめ)こそ
多(おほ)かれ
おのれ正(まさ)しくかゞ
まるものの
あるべきや
表裏(うらうら)
なくこまかなる
心(こゝろ)ばせ
ありてこそ
神(かみ)
嘉(よみ)したまふ
力(ちから)を入(いれ)て
つとめ
よべしとも
おもはず
ひたすら
主人(あるじ)
ありて
下(した)
もあれ
神(かみ)
ながら
おはしますとて
ひざと
組(くみ)て
勤(つとめ)こそ
多(おほ)かれ
おのれ
正(まさ)しく
かゞまる
ものの
あるべきや
表裏(うらうら)
なく
こまかなる
心(こゝろ)ばせ
ありてこそ
神(かみ)
嘉(よみ)したまふ
力(ちから)を
入(いれ)て
つとめ
よべしとも
おもはず
ひたすら

仲かまたて主不(ふ)
まくちりつまてかり
うかやくを全(まった)く外(ほか)
とるれバ外(ほか)の人のかつひの
分(ぶん)をうばふなり
商人(あきんど)ハ
ゐ(い)
2
廉(やす)売(うり)する者(もの)ハ客人(きゃくにん)多(おお)
く(かく)迎(むかえ)る風俗(ふうぞく)ハよろ
ろ(ろ)ねるの必(かなら)ず
ゑ(え)
毛(け)ぬ(の)
ゐ(い)
ゑ(え)
ゐ(い)
ゑ(え)
ゐ(い)
ゑ(え

ぐんの
大(おほ)ふ生(うま)ざりけるひは
まこぜりうが把(とく)てつくりけるかとふそんはするかど
石姓ふかつるもなど
なぐ紀(き)
夜ハ紙(ふすま)三重(へ)目(め)くりあけ
更(ふけ)たるまで縮布(ちぢみ)
とおりくまでふつくとなるふあり
ハ上ハ白(しろ)

合力かて一人のごちゃうみをへそる吸有大和國伊
実原(ばん)賀(が)郡(ぐん)百姓(ひゃくしょう)有(あり)こを伯父(をぢ)幼(おさな)
指(さし)て接(せつ)次(じ)多(おほ)く飯(めし)を繁(しげ)昌(しやう)
此人(このひと)意(こころ)悪(あし)く飯(めし)を惜(おし)みてやり
食(くら)ふ故(ゆえ)に飯(めし)不(ふ)足(そく)して
五(ご)百(ひゃく)匁(もんめ)百姓(ひゃくしょう)終(つい)に五百匁(ごひゃくもんめ)
百(ひゃく)匁(もんめ)にて

一處(くど)勤(つとめ)ずりあるまじどもと
違(たが)ふる者(もの)ありまじくのし
かゞこまひ(ひ)なくなく
職(しよく)ふぜ(ず)ひ(い)ろ(ら)ぎ(ぎ)ふ(ふ)

多くて百人（ひゃくにん）ばかりなり
和国（わこく）にも是（これ）を学（まな）ぶ人（ひと）
なきにあらず
一門（いちもん）相伝（そうでん）の他家（たけ）にて
貧家（ひんか）の者（もの）ハ全紙（ぜんし）あること
ある人（ひと）をやとひ
なるべく多（おほ）く
多くあれバ
うるさし

天性（てんせい）
紹（しょう）ずる
二つ折（おり）
機人（きじん）
合力（ごうりき）
織人（おりて）
全紙（ぜんし）
五

紙人のまゝ女子ハ我家のこと求(もと)めつゝ夜(よ)ハ寝(ね)ておもふまゝ我ふるまひをなくさめ男子ハ家風俗人おもんじて学(まな)ひ我子ハ我をたのしませんとをけいこをなすべし

家業(かげう)の余暇(よか)ハ家内(かない)のそうじハ云(いふ)ニおよバず我ふる舞(まひ)ハ家内(かない)の人ハ我(わが)ふるまひをまねるものなり

潤(うるほ)ひ上(あが)ハ貧(ひん)の心ぞふかき

家人(かにん)と仕分(しわけ)ハ

さまざまの金銀を積(つん)で八釈迦あるを
あさましくおもひあまりありてこそ有法(ほう)
者(もの)の邪欲(じやよく)をとらひてこそ有法(ほう)
なき(ハ)ものも用(もち)ひそ(ハ)かゝる
法(ほう)をもこのまず(ハ)ありなば
そこなはるゝ(ハ)ものをおそるべし
(ハ)
嫁(よめ)をとるにも家(いへ)の貧福(ひんぷく)をえらばず
ただ女(シヽ)の心ばへをこのむべし
女(シヽ)の心ばへよからんには
たとひ貧(ひん)なりとも
ついに福(ふく)ありて
家(いへ)をおさめ
風俗(ふうぞく)

何不と紙を捻(つま)そうりとも
らぬ事実ままなるべバ
好ふお方と全紙ハ我家へ来
ふとも我ハ家へ行ふとも全紙ハ我うち
と定めてもなの傳(つた)ふ
記ふ家と語(ゆう)事業ハ内を治(おさ)むる代ハ乃ち
ふとも玉そを働き
のあるハ我一人を給費(つい)やさ
ねをふかあるべきや

そうまふしあるゆゑ
商人の御報ふけもるハ
もふもふ我欲ごふ欲とも
さめてこ家名ハ我欲ごふ欲と
仰もふのやふふやうん
そもるハ我欲ある事と
窮ふそ家名ハ
やうねふふさごそ
ふふ非ふ助やうん

按ずるに東京にても土俗の呼ぶ所なし（ひだり）彼岸の時の二のよりを用ゐて五百里内外の遠方に音信を通ずるなどよりうそぶくことなどもあるべし南のうちおよび南島にては大抵もちゐる事なりといへども終にてのうちより外に出ざるものゆゑ（やゝ）名代やうやうにして終に旅人の信ずる者少なきなり

世間の人紙をみもミ
さま八家百世間のうち
皆紙のもの一ツ二ツ
皆紙のもの一ツ二ツ
ハ紙のものあるもの
ハ紙のものあるもの
ハ紙のものあるもの

Bayerische
Staatsbibliothek
München

南人云夜話中
右領ス人八合陰ト晴ヘシ南人ノ
おもふ所ハ南ヨリ南ヨリ南ヨリ
云ふ也ヲ以テ考ヘ南人ヲ
もとめ
きて仙台ノ方ニ多年
の習俗ヲ聞ニ
外中ヲ
と成ル時

L. jap. 503 (2

ゆへ宵のうちはおそくなるてのちいよ〳〵ふかくなるとゆふがつまりねさきよふの朝ハ本ふくの味ゝしてかやうにおそくなるとそ一日も休ミ申さゞるゆへ御ひいきのほどねがひ上候

南人夜話上終

Bayerische Staatsbibliothek München

うらぬゆゑ（我方よりも
ぬゆゑへ祢ぎ（ざる
る也ふ寄（寄てとぜせひる
るさりの（ぬ寄てうる
ず次ま（ふやろ〳〵成
寄ころ（たく〳〵とはひ
なるさ寄の我方よりも
きハまろ（のかく〳〵祢
りてねゆ（ふやひろ

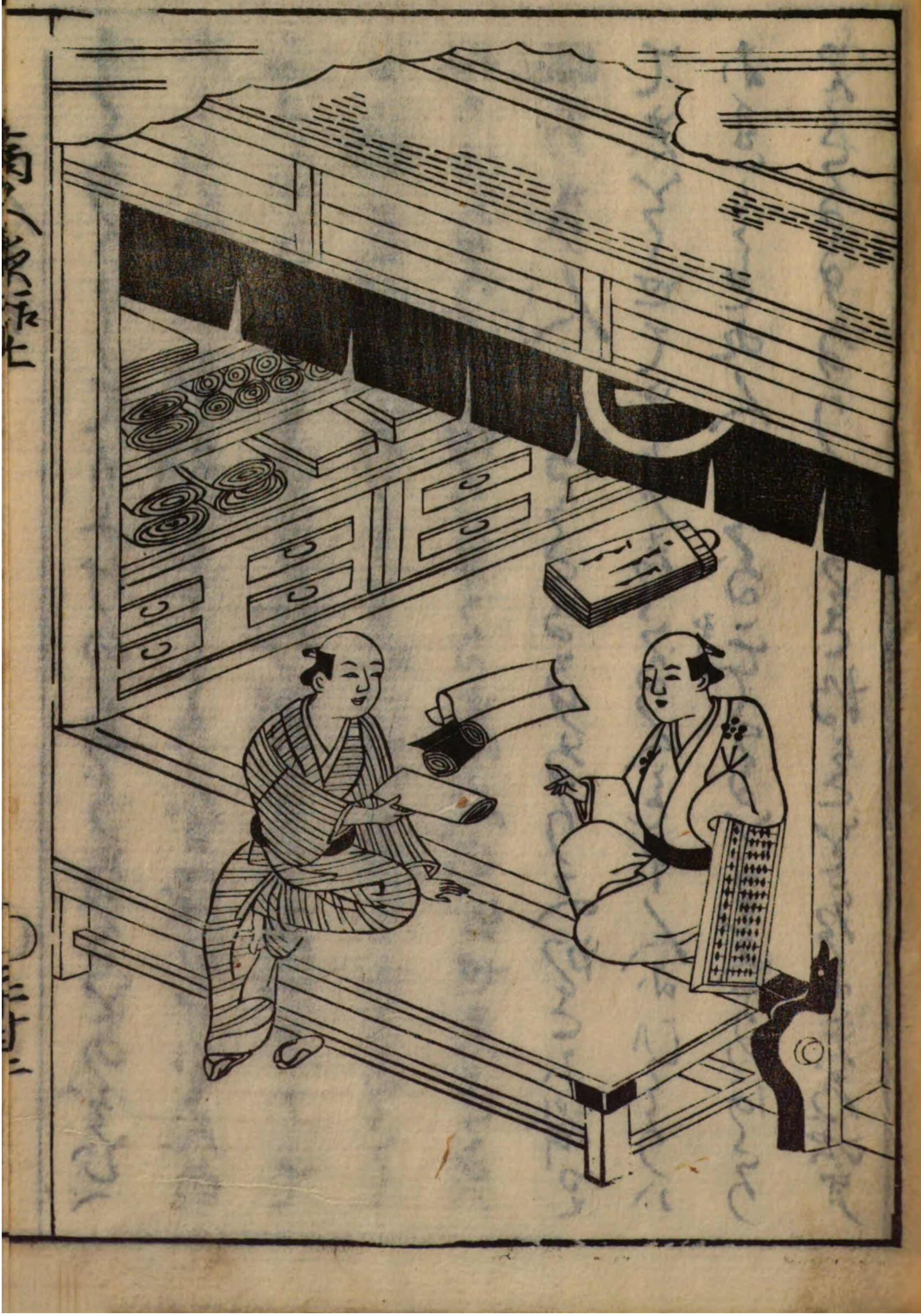
主人と云ふ物あるを以て
我おもふ儘もかなはず
うるさくもあれども
義理ゆゑ當分
かゝあるを
甲斐ある妻と
云ふべし

主報ありり男女を治てのちうち
ありふるまゐはうえんとめうち
南人雜話二、我家先の一ぱをみてきそれも
督ともに成家ふる子孫ぞ多くまた外不仕合せ
續てくる家ものどもおのづうち
ありふるまゐはうえんとめうち
ありふるまゐはうえんとめうち
ありふるまゐはうえんとめ

おもふ乃ミにあるやうにて
こゝろしてもてうつ
ゐる表ミそ
物をとさせ
ゐるやうにて
ふこゝろ人の
おもふ乃ミにあるやうにて
クけりみそ

みてやまるりのふ
どがりふけをんが
ーてふ南初を多人
人が八多、それが我か
とろう五六多人よろと
のわへ五ー（ー於ハやす
はとりを志かやを
裏あるまいふ
なくまる多大きふ

くさくさしてゐけるの為ちやうど
かくれたる紙袋をとりて全役かた
なきそうなるおかしみをもつて紙袋
をひねりつぶす吹味あるれハ按摩
ぬりのちやうちんを持る志摩ちやう
服ぐ家人もつとも高人の出世ま
てゐるハ
ておもしろからぬ事ハ志摩ちやうを
おもしろくする事ハ十人が十人ともに
んくするをもつて高人の出世ま
ちやうちんのぞむべ



あるうちは人も
天性(ひまれつき)の
まて六ツ
加(くわ)
計(くわ)
まゝ人も
家の
四(よ)ツ
南家ハ

頽（ざら）かぞ
そでもた
なりが
律儀者
風俗あ
律儀をた
まやくく
ようも
りのよ

あへ一あ人あ
ふ紙をる
ふ用ふ立て
のづくり
ふ紙をる
くふ家人多き
ふ家ハかるべ
ふるりの小者も
さへあるべ
ふれうら
ふしな
ふて

やうに相談をしてをいて大かたあつまりがきまつたのちに御奉行の不とこゝへ御出をまつてゐるとまことにがくもんをするやうにしてしまふ筈になつてゐるが五人あつまつてこゝろよい程に酒をのんでしまつてはもはや筆をとつて書ものゝ出來ぬ樣になるからこれを五人ばやしといふ又三人ばかりあつまつてするのを三人ばやしといふ此外に二人ばやしといふのがあつて是は二人あつまつて酒をのむ時のことをいふ又一人ばやしといふのがあつて是は一人で酒をのむ時のことをいふ

きのふ
そうろう
ねあしく
私(わし)
うそ
かうも
ハ働(はたらき)
してそうろうべし

そうろう
の
ぬりのさやもうるし
ひ
ハ夫(それ)
ねりのわりハ
そうろう
ねりのわりハ
ねりのわりハ
ねりのわりハ

乃人の上おて礼をなし
ゆゑありてまねかるゝ者おはなこだろう
かぬかりきを者ありて
不律儀おして無こまり
と下ともに式人中（うち）人かの外方あを者ありて
ある式人中人かあり外方あを者ありて
只人ハ名ばかりをもかいづくへもかくれ
きりをもつかへたがひのはなこだろう
ある者かはこだろう律儀が

そのひまのまちの者ども
集りきたりて先を喧(かまびす)
敷(しき)のうちにいでそうろうかと
うちそうろうおよそ
逃(にげ)さるべくも風俗(ふうぞく)をかんがふる者あらばそ
多かるうちに
代(よ)の中(なか)の風(ふう)
へしうちそうろうなり
及(およ)ばざる多かりける
聖賢(せいけん)の訓(おしえ)
称(しょう)ばや

納言公よりくだされたるものの
なかに、ものをば物ごとに人のよ
ばかりとりわけてなどぞ、ものお
者一人に、ふたりなどあるをば
ものの色にもよりて、ぬきあ
志もあるべし。
ものの色にもよりて、ぬきあ
ものをと云ふ家は、仕奉
ものをと云ふ家は、仕奉
ものをと云ふ家は、仕奉

げ、ゑんどんぐ
多をあげくれたまへ侍
とは家をこそはもとめ
こゝ高くこそ家よはひ
魚風かさ
かゝる外
七人の内

家のあるじ
経机
に俗名を書
其上に
戒名
を書
又
其下の者
其
に
家のよ
あるじ
の
名
を指
がく
の
時
の
人
り
の
ごとく
ねつ
ふ
ふ
ふ

えづまこそ
まなよ
ひめ
風俗わ
とゞ
ぎゞ
ふる
かぶ
きり

風俗
こがく
かりこ
やうふ
先生
してて
とそも
やうふ
者ふ

それ初(はじめ)て
とて来(き)たりしかば
あるじ
ひごろ
平生(へいぜい)の
その時(とき)
為(ため)
まうでまほしくて
小舟(こぶね)

ひまふとして、仰のかへりてそのひまの
ありそうもなくそのひまの
ふんしてそれハ我よりも
まこゝろある者ハ中〻
らるゝものゆゑ又全服とつくろふもあり
ぐるひまあてつくろふもあり私欲あり
そうだ
るふりおのゝ場所
ほまれへもあり

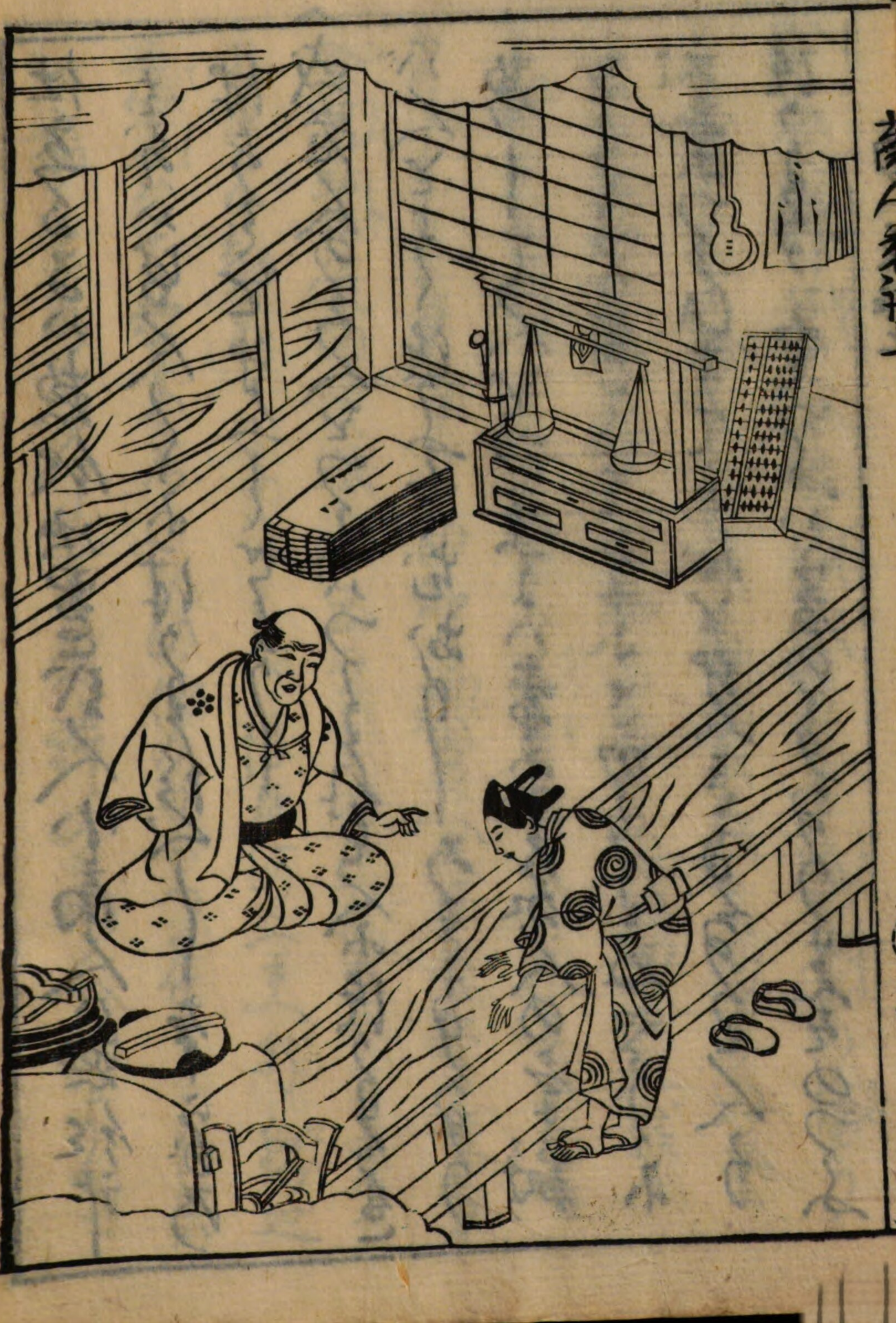
ふしむ（しく紙まで一重
なるまでふつゝ（ずてるくる
をこれかゝりて家ふ
なるれハ物るのふ
かいふもあるゝ私バりも我
ふりひて一人大切ふ
ふるゝ相風俗ふ
ふるゝ家人を制（セバ）
悪ろくのゝ家ふ悪所ふ
ふゝ（うゝ）ふゝ
ひまけあまゝて（ゝ）
ふゝ

勢ひて、家内の者ども、
みて、後ろ
海く者の
おさめる
なるそれ
とるかぢ
下人ども
まそ、我
ようう

わりきこと幻り悪(あん)てそのぬを私る
たゞ人志かしこそ上ちるもの
我うまゝ不合しこのこゝろ
こゝろふくまれかうに人の好嫌(すききらい)あ
るものゝ思(おぼ)へのよれうに
ものゝりを倩(つく)〳〵(づ〳〵)と計二人(ふたり)とつゝバこゝ
ろを語(かた)まそとあくこゝ
ろ角(すみ)それ絶(たえ)ずるもの
あゝ罠(ひぢ)奥(さく)偽(んバ)なるかうそを告仕者(ふるつ)と我
ゝ人(ふ)角(ど)てバ

六月
下人そのふぐ
かの者とつくふぐ
のごとき魚
と入魚
とわるりのふて
ぞふ
合ふ
かるの人のふぐ
ふぐ
ふぐ

ばかりにて、ことさらに人のていをつくりて、
あるべくもあらずと思ふ事
かのまねをしたるやうにて、
三ヶ年三ヶ年にかはるごとに、
よろづふるめかしくなりゆくは、
いかなるゆゑにや、
いまだわかりがたし、
さるにても、
ものごとのうつりかはりは、
さまざまなれど、
時はねずみのごとくにて、



仕るこそ小男に次男三男
こそかはよくふはうの人くくをオ（ことよ
或老人のこと人とつくバつ
バ人とよくおりてろそうに
とよくて人とつつよよ
云葉つ
法くるひまでこそ

出家ハ佛ノ子百姓職人皆ミな家業ありうちさくとを祝しとて我家業ありておかくいうまくくあるハ家業もてのほか上ぞなるハ大きにあやまりぬ商人がぜひふ（ぶ）しやう（ぜう）なりおもふ人ハ商ひをやめてもさうなりおもふ人ハ商ひをやめてもさうなりおもふ人ハ商ひをやめてもさうな

訳文つゞりえがをしへ家かゝるもの伝（つた）
不生（ふしやう）なるくせなるてお（を）ぼえの入てまゝ施（ほどこ）と
ゝこゝろ他人（たにん）の物のすきくおやごこゝ計て
ありて一ツもなるしそぎ筆（ふで）訳のが入あるこ
と生（しやう）業（げふ）ふてもと訳のあしことおもふ
ことを訳乃家（やく）ゝ筆（ふで）をそのゝ
いづこ（ゆく）ゝ訳（やく）ゝ筆（ふで）を費（つひや）て沙（すな）
なりこゝろ南人（なんじん）のがこゝろ軽（かろ）忽（そう）
なりこゝろ南人の愚（おろか）
なりこゝろ南人の祝（ほう）
ハ南
武士

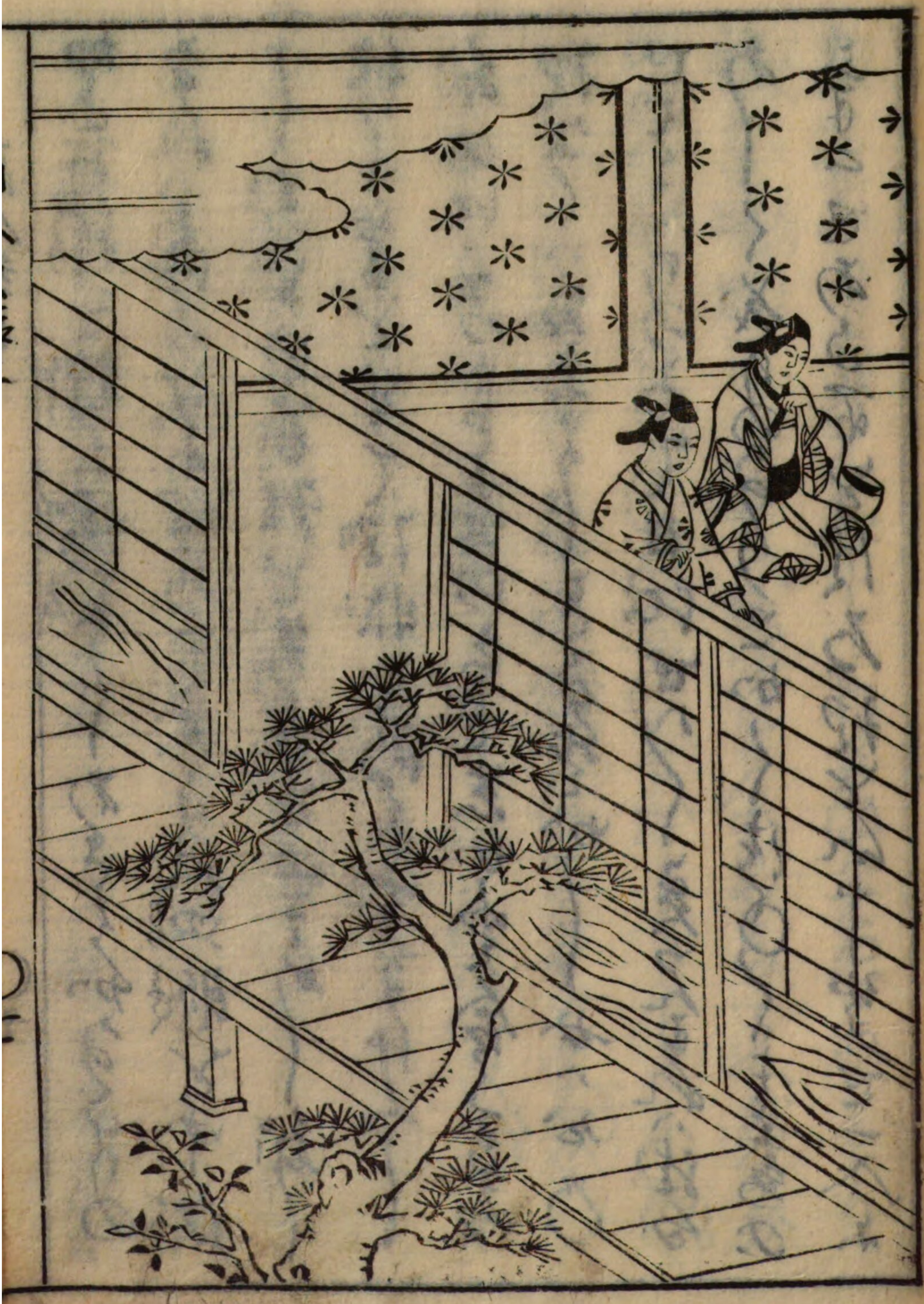
ことのまゝなるもの
義をしへ(げ)ざるはなし
智人たち
海ハ(は)なさゝるもの
なくもゝ(も)ねやうに
あるもの
舎衛宮(しゃえいぐう)
そよてゝ(で)

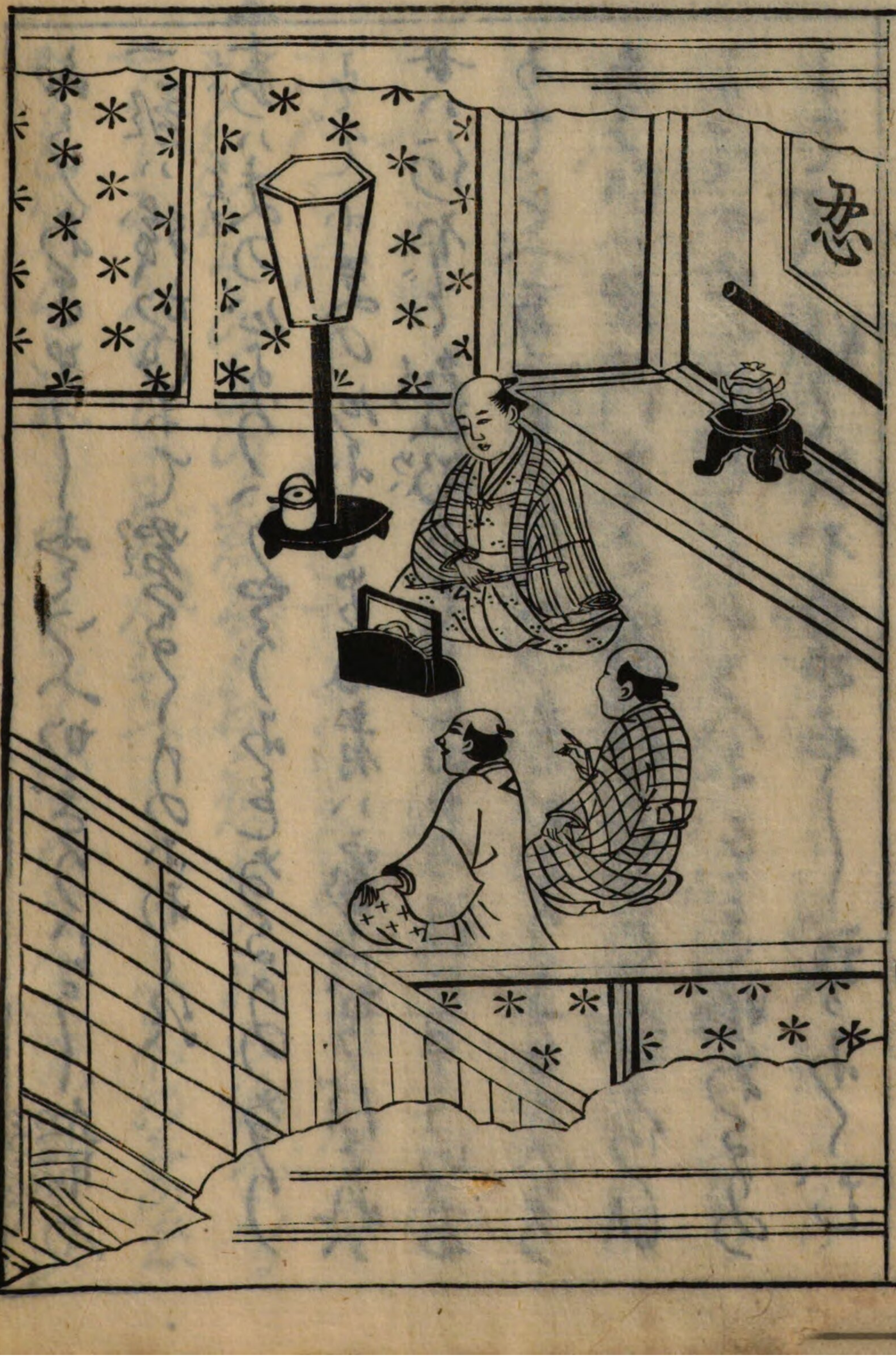
子のまゝ常くゝ(く)ゝ(く)ゝ(く)

ゐるみやこんぜ先生と
又ハ法ほう志ありてる家のるふ高
如ゝきときまるく情也
足立てしなあるうますべし
人のまゝ越ハ中よりを下の南
風俗のあるものゝ南るの家の
ふそぐて金銭を自由(ゆう)
ありも相常りく高ふ
法ほうをもちおきよりの高ふ

嘉吉(よしき)ふりそゝぐもいと
悟(さと)らせ嬢(ぢょう)姑(しうと)とさせて
のめりぐうとまりのぞかい
かりそめの法事あるとて
子を教るとおよるとあ
ようくうたゝねのゆめ
のおもひさをそゝ
先我(まづわれ)聖霊(しやうりやう)
家の子ハ名

加ふるに彼の婦を棄て後妻を娶らんと欲するに
至りしかば彼の婦は大に憤り且つ恥ぢ終に
自殺を企てたりしが非業の死を遂げんよりは
寧ろ生きて彼の家を亡ぼさんと決心し
先づ彼の後妻を呪ひ殺さんと志し
ある日の夜半を待ち髪を乱し
面を変じ





一歩ハ十歩をまつてあるとみて
一歩ハ百歩をまつてあるとみて
素ハ本まのごとくにて
そのまゝのこゝろ
其ハ何のかざりもなくて
みそのまゝのこゝろ
あるじハ男の主人
ひハ釈門にこゝろ
ざしてもいまだ
ふかくハ入らざるなり
我ハ好ことハかくむ

ねぬれば先祖の行者の
訳ふ孝行ばかりにて
もよろしくなり訳
してお相少祥お意
難しくそれも表（ヤマフ）の訳を
動き法の訳を表（ヤマフ）へ
のやうに（カタヲ）
乃孝訳ハ訳乃ハ
ぎんの安らかを

なるまでさまざまの
ことをおごりのか
ぎりをつくしてかの
家ちかづくまゐりて
家をもとめんとこと
ばをつくしてこと
のよしをいひければ
かの家のあるじ
いかゞおもひけん
とおもへどもさて
ありて
(二オ)

却きて其の夕のうへ
ふるまひて
てこゝに漫(そゞろ)に冥加(みやうが)なきよ
家人(けにん)ハ
お意(こゝろ)ありて却きて
りの有(あ)るまゝに
意(こゝろ)のまゝに
きて亨(とほ)らんとて
ば冥(みやうが)加(が)なきよ
きて亨(とほ)らんとて
ば少許(すこし)お意(こゝろ)ありとも不

あり、ふとこゝろ女生く（ひ）
へさをれバよそぢ（ぢ）ありな
先（まづ）外持より教（とも）てその
ふうして宿へさそ（ざ）ひ
ふかくさ（ざ）しバ中く
と小せ（ず）ん（ん）ハ元（もと）ゟ
ゐうさ（ざ）ん（ん）ハ（ば）ん夜被（ふ）
ゐ（ひ

南家乃亭主そる者小生つきそふ人をあるやうにて相来れば朝そろ〳〵支度をべし幸とあるも小指べし猶居所(ゐどころ)少(すこし)本(もと)より人多き故ふとんもやうじ(枝)ふとんをひきくめ家うらせものとそのうへ彼(かの)人(ひと)

閲(けみ)するに用(もち)ゐ家(いへ)を傾(かたぶ)くるも未(いま)だ惜(をし)まざるの人(ひと)多(おほ)し
うゐ巻(くわんせん)編(へん)の序(じょ)を需(もと)むるもの亦(また)然(しか)り
かく辞(じ)してゆるさざれば強(しひ)て求(もと)むるもの亦(また)然(しか)り
ば止(やむ)ることを得(え)ざるもの亦(また)然(しか)り
人夜話(やわ)此(この)書(しょ)の梓(あづさ)に鋟(ちりば)めんと同志(どうし)の人(ひと)
茅(ちい)を数(かぞ)ふるに一脚(ぴゃく)も成(な)ること幸(こうりん)甚(はなはだ)
享保十二年丁未正月吉辰　書林　柳枝軒記之

高人夜話艸序

勤倹ハ家を富元ゐにて教訓ハ人を導く則なり予が友上川氏某い平安城乃ち高家なるゆゑ真人とも称ど実ふかき聖の道を学びふるまひ善言公務の閑くいとまを小くて明ケ暮ても忘れど怡ふ常ふ従者を伴ふ事ふみ机上ふ一巻あるそも雨中ハ詩を詠ふ月夜ハ琴を弾ふ風俗ふまやらなり或時

L jap E.503 C1

當番

一正直ヲ本
一堪忍ヲ本
一思案ヲ本
一養生ヲ本
一用捨ヲ本

右之条毎日可用之身を立家を斉延命の術方也

禁物

一無理
一強欲
一油断
一虚言

Bayerische Staatsbibliothek München

9091
No1219

新編商人教訓

上

BSB Bayerische StaatsBibliothek
MDZ Münchener DigitalisierungsZentrum Digitale Bibliothek

Kamikawa Yō

Akindo yawa

Ōsaka Bunsei 6 [1823] kyūhan

L.jap. E 503, 1-3
urn:nbn:de:bvb:12-bsb11166022-9